

中学校 技術・家庭科 部会

部会長名 赤村立赤中学校 校長 重藤 公暢
実践者名 香春町立香春中学校 主幹教諭 田中 朋美

1 研究主題

よりよい生活を工夫し創造する生徒を育む技術・家庭科教育
～思考・判断・表現する場を仕組む活動を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会的背景から

21世紀は、多くの情報、優れた技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、「知識基盤社会」の時代である。現代の子どもたちは生まれたときから、それらの情報・技術に囲まれて生活してきている。個々の素晴らしい製品に触れるだけで使用できるため、それらの技術の素晴らしさを実感できていない。また、あまりに便利な生活に埋没し、学びの中で身につけた基礎的・基本的な知識・技能をもとに、日常の生活の中で「もっと改善しよう」「便利になる方法を考えよう」と、工夫し創造するところまでにはいたらない。それは全国的な学力低下や「科学離れ」といったフレーズでも語られるように、近年教育界の大きな問題となっている。

(2) 技術・家庭科の本質から

今回改正された学校教育法では、学力の三要素として、①基礎的・基本的な知識・技能②思考力・判断力・表現力等、③学習意欲、を重視しており、習得した知識・技能を活用させるためにどうしたらよいか、全教科に共通した課題でもある。

また、中学校学習指導要領技術・家庭の教科目標、「これからの生活を見通し、よりよい生活を創造するとともに、社会の変化に主体的に対応する能力をはぐくむ」という観点から、各分野の目標が設定されている。

そこで、本部会では「思考・判断・表現する活動」を含む指導を工夫することによって、学んだ知識や技能を実際の生活で活用する態度や能力が高まり、「よりよい生活を工夫し創造する生徒」を育成することができると考えた。

(3) 生徒の実態から

福岡県内で、技術・家庭科に関する意識調査のためのアンケートを実施し、全国と比較した。その結果、「技術・家庭科の学習が好き」87%（全国 72%）、「技術・家庭科の学習は大切だ」88%（全国 86%）「技術・家庭科の学習は普段の生活や社会に出たときに役立つ」86%（全国 86%）でやや高い数値であった。したがって、福岡県の生徒は技術・家庭科の学習に対する興味・関心が高く、本教科を重要と考えている実態がわかる。

しかし、「自分で考えたり工夫したりすることが好き」75%、「解決方法を自分なりに考えようとする」72%、「自分の生活をよりよくするために工夫したいと思う。」82%、「学習したことを生かして自分の生活を工夫しようとしている」65%であった。

この結果から、興味・関心が高い割に、主体的に学習したことを生かし、生活を工夫・改善しようとする生徒が少ないという実態がわかる。したがって、研究主題を達成するためには、3年間を見通した指導計画のもとに、各題材で習得した、知識・技能を活用し、「思考・判断・表現する活動」を、各場面で様々な手段を用いながら繰り返し行う必要があると考えた。

3 主題の意味

- (1) 「よりよい生活を工夫し創造する生徒を育む」とは
生活に必要な基礎的・基本的な知識や技術 (skill) を習得させ、それらを活用するための発想力や実践力を育むことをねらいとしている。
- (2) 「思考・判断・表現する場を仕組む活動を通して」とは
ここでいう「思考・判断・表現する場」とは、これまでの経験や基礎的・基本的な知識や技術 (skill) をもとに、与えられた事象において自分なりに思考し、他の人の考えを聞き、様々な視点から、また焦点化させながら自分なりに思考し、評価、判断し、その後の行動を選択する場のことを意味する。このような場を何度も繰り返すことにより自分の考えを深めようとすることができ、明確な根拠を持って評価、判断し、表現をすることができると思う。

4 研究の目標

習得した基礎的・基本的な知識・技能を生活に活用し、生活をよりよくするために、必要な情報を収集し、経済性、環境、安全、効率、健康の視点から生活や技術を総合的に評価し活用できる生徒を育む、有効な手段になりうることを究明する。

5 研究仮説

基礎的・基本的な知識・技能 (skill) を明確にし、解決すべき課題を設定し、思考・判断・表現する活動の工夫をすれば、自らの生活の改善に向けた態度が育ち、よりよい生活を工夫し創造する生徒を育む事ができるであろう。

6 研究の計画 (授業の計画)

- (1) 題材名 「幼児とのふれ合い、関わり方の工夫」
(2) 題材の目標及び指導計画

題材	「幼児とのふれ合い、関わり方の工夫」		総時数	7 時間	時期	4～8月
目標	<p>○幼児についての基礎的な知識を活用しながら、幼児との関わり方を工夫できる (関心・意欲・態度)</p> <p>○幼児への理解を深めるとともに将来の生活に生かそうとすることができる (創意・工夫)</p> <p>○自分なりの課題をもって幼児に触れ合うことができる (技能)</p>					
次	時	学習活動・内容		評価 (観点)		
一 次	2 本時 2/2	<p>1. 保育所訪問での幼児とのよりよいかかわり方について考える。</p> <p>(1) VTRを視聴し、幼児の特徴や接し方について、個人でまとめ、班で交流する。</p> <p>(2) 各班の発表や保育士からのアドバイスをもとに、幼児とのかかわり方を考える。</p>		<p>・幼児とのかかわり方を考えることで、意欲的に保育所訪問へ臨もうとしている。(関)</p> <p>・VTRや班員・保育士のアドバイスをもとに、自分なりのかかわり方を考えている。(工)</p>		

二 次	3	2.保育所を訪問し、幼児と触れ合う。 3.保育所訪問の成果等をメモする。	・自分なりのかかわり方を試みながら幼児と触れ合っている。(技)
三 次	2	4.保育所訪問を振り返り、自己評価及び保育体験レポートをまとめる。	・体験の成果と課題が評価できる。(知) ・体験を自分の生活に生かそうとする。(関)

7 指導の実際

本時の主眼

- (1) 幼児に関心を持ち、進んでよりよいかかわり方を工夫しようとする。
(関心・意欲・態度)
- (2) 幼児の様子や保育士のアドバイスから、よい関わり方を工夫することができる。
(工夫・創造)

本時の展開

学習活動・内容	指導上の留意点
1. 昨年の保育体験の様子を知る。	・体験した生徒に、困ったことや感想を発表させる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;"> めあて 幼児とのよりよい関わり方を工夫しよう </div>	
2. 幼児の様子（VTR）を視聴する。	・幼児の年齢の違いや保育士の関わり方に注意しながら見るように促す。
3. 予想される場面から、どのように関わると良いのか考える。 ・泣く ・ケガ ・けんか	・既習内容をもとに、発達段階を考えて、どのような関わりが良いのか各自考えさせる。
4. 班で交流し、幼児と関わる際に気をつけると良いことをまとめ、発表する。	・その方法を選んだ理由を明確にさせる。
5. 保育士のアドバイスを聞き、自分たちの班と比べ改善点はないか考える。	・よりよく関わるために、アドバイスを参考にして、再度考えさせる。
6. 幼児と関わる際に心がけることをまとめる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;"> まとめ 幼児の様子をよく観察し、幼児の発達に合わせた関わり方をすることが大切である。 </div>	

(1) 事前学習【本時含む】

〈ねらい〉

自分がかかわる幼児の発達状況に応じてかかわり方が工夫できるようにする。

① 手立て

- かかわる幼児の年齢を生徒に選択させる。
- 幼児の具体的なイメージを持たせるために、年齢ごとの保育所での様子を VTR で視聴させ、特徴を記入させる。(資料1)
- 保育所で起こり得る場面を複数想定し、どのように触れ合うか考えさせる。
- よりよいかかわり方を決定するための判断材料として、班員と意見交流をし、保育士からのアドバイスを受けさせる。

先生かやる事や言っていることをまねてしていた。
 1歳児になると外で遊んでいた。
 3歳児以上になるとケンカなど"をしていた。

資料1 事前学習プリント【VTRで気付いたこと】


② 生徒の様子

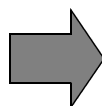
生徒は、これまでの学習や視聴した VTR の様子を思い出し、それぞれの場面を想像しながら触れ合いたい幼児の年齢を選択し、どのようにかかわったら良いかを考えることができた。(資料2)

また、班の意見交流で、より具体的な内容に気付いて書き加えたり(資料3)、姿勢を低くして幼児の目線で話をするなど、保育士から出されたアドバイスを知り、修正したりすることができた。



資料2 事前学習 授業風景

場面	自分の考え
泣いている 	優しく、「大丈夫」と声をかけて上げる。 たらこしてあげてあげる。 おもちゃなどに別のものにきょうおをもたせる。



交流後の付け加え
変顔などで、笑わせる。 背中をささって、 たくさめてあげる。

資料3 事前学習プリント

(2) 保育所訪問

〈ねらい〉

事前に考えた幼児とのかかわり方が実践でき、新たな幼児の特徴やかかわり方に気付くことができる。

〈手立て〉

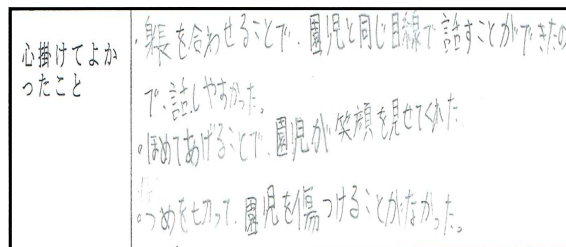
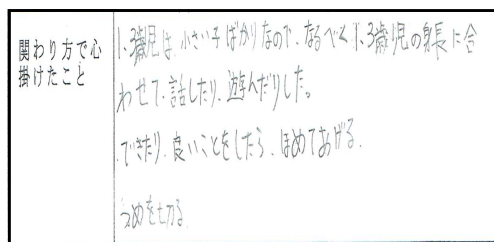
- ① 訪問の前日に自分で決めた幼児とのかかわり方を確認させる。
- ② 訪問後すぐに、実践の成果や課題をプリントにメモさせる。

〈生徒の様子〉

生徒たちは、自分が考えたかかわり方を実践するという目的を意識しながら体験することができた。そのため多くの生徒が意欲的に活動した（資料4）。また、体験当日の記憶の新しい内に、成果と課題や感想を記録させることで、自分の実践した内容を評価することができた（資料5）。



資料4 保育所訪問の様子



資料5 保育体験レポート【心がけて良かったこと】

(3) 保育体験のまとめ

〈ねらい〉 幼児との触れ合いの中で学んだ、幼児の特徴やかかわり方について、まとめることができる。

〈手立て〉

- ①保育体験レポートに、「かかわり方を心がけて良かったこと」「もっと良くしたいところ」を記述し、自己評価させる。
- ②事前学習プリント（幼児の特徴）と比較しながら、保育体験レポートを作成させる。
- ③対象クラスへのお礼の手紙を書かせる。

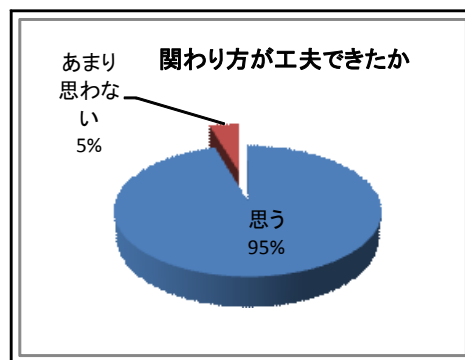
〈生徒の様子〉

事後評価として、保育体験レポートをまとめさせた。事前学習プリントや体験直後にメモしたプリントをもとに書かせたので、これまでの学習を振り返りながら自分の実践を詳しく自己評価することができた。

保育体験レポートの生徒の感想には「幼児とかかわるときに心がけることで書いたものは、ほとんど達成することができた。…将来、良い父親になって、良い家庭を築いていこうと思う」など、将来よりよい家庭生活を営もうとする意欲を示したものが多く見られた。さらに、最後のまとめとして保育所にお礼の手紙を書かせた。感謝の言葉の他に、保育体験で学んだことや感じたことなどを入れて書くようにアドバイスした。保育体験レポートの感想でも同様であるが、多くの生徒が、幼児に好かれてうれしかったこと、保育士の仕事は大変だがやりがいがあり尊敬できること、この経験を今後の生活に生かしていきたいことを書いていた。

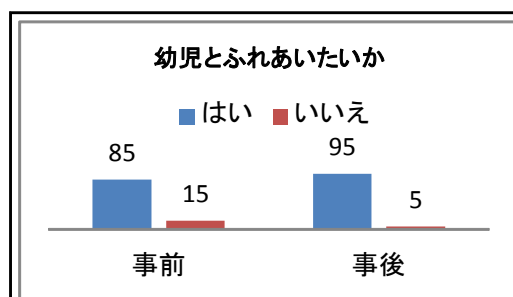
6 研究の成果（○）と課題（●）

○ 「保育所訪問で工夫したかかわり方ができたか」を問うアンケート（資料6）では、95%の生徒が「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしており、幼児への理解を深めるとともに、幼児の心身の発達に応じたかかわり方を工夫しながら幼児と触れ合うことができたといえる。その要因として、幼児とのかかわり方に関しての自分なりの課題を持たせたことで、保育所訪問に目的意識をもって臨むことができたと考えられる。



資料6【生徒アンケート】

○ 授業前後の幼児への興味・関心を問うアンケート（資料7）では、特に「幼児と触れ合いたいと思うか」の項目で伸びが一番大きくなっていることから、幼児へ関心を高めることができたといえる。その要因として、保育所訪問に自分なりの課題をもって臨ませたことにより、幼児の発達の状況に応じてかかわり方を工夫して幼児との楽しい時間を過ごせたことが生徒たちの自信につながったと考えられる。



資料7【生徒アンケート】

○ 多くの生徒が保育体験レポートや保育所への手紙に「これから学習したことを生かしたい」と書いており、将来の生活に生かそうという意欲につながることができたといえる。

● 幼児への興味・関心を問う事前のアンケートにおいて低い数値を示した生徒で、学習後のアンケートでも低い数値を示した生徒（特に「幼児と触れ合いたいかわ」の問いに「いいえ」と答えた生徒）がいた。その要因として、保育所訪問で自分が考えたように幼児と触れ合えなかったことが考えられる。自分なりの課題を設定する際に、幼児とのかかわりで想起できる問題場面を設定し、模擬体験などを行いながら解決法を考える活動を仕組むなどの工夫が必要であると考えられる。

【参考文献】

「中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編」（文部科学省）

「評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 中学校 技術・家庭」（国立教育政策研究所）

「技術・家庭科 研究授業 家庭分野」安東茂樹 編著（明治図書）

「資質・能力を育てる 中学校家庭分野編」河野公子 編著（明治図書）

「技術・家庭題材集 家庭分野」（開隆堂）